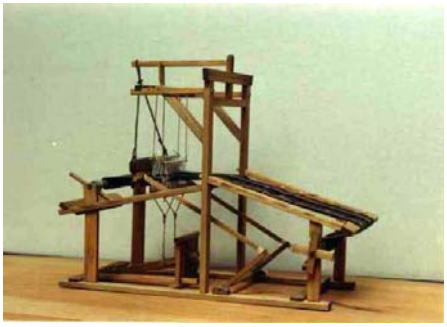
日本の手織機 便り

２００４年１０月　　第３号

遅くなりましたが手織機便り第３号をお届けします。

6 月 11 日（金）～13 日（日）に文部科学省科学研究費特定領域研究「江戸のモノづくり」の第３回研究者集会が三重大学（三重県津市）で開催されました。津市の隣、松阪は松坂木綿で知られているところです。江戸時代には三井家など松坂商人の江戸進出によって縞柄の松坂木綿が非常にもてはやされました。明治後期以後は衰退しましたが、現在でも手織りセンターなどで伝統の保存に努めています。松坂市立歴史民俗資料館には重松模型の原機が２台展示されています。左が展示されている高機、右が重松模型です。

高機１



この高機は松坂で使用されていた長さ２m以上のものですが現在は実際に織ってはいません。この型式の手織機は滋賀県・千葉県にも見られます。

高機２

この手織機は松坂の最も代表的な型式のものです。現在もこの機で織っています。ただ重松模型には、バッタン（飛杼（とびひ））の装置がついていません。鈴木館長のお話では、現在この機で織っているお年寄りの方は若いころから既にバッタン機に慣れているので、かえって完全な手織りはできないとのことで後からつけられたそうです。

松坂市立歴史民俗資料館にはこの他に木綿関係の資料や竹筬作成機なども展示されていました。

手織機情報紹介

高機　静岡県掛川市　川出幸吉商店所蔵

江戸時代から掛川では葛布の生産が盛んに行われ、最盛期は昭和２０年代。川出幸吉商店は明治初期、初代川出幸吉の考案した襖地用の葛布が好評を得て本格的に生産が始まり、以後様々な苦難を乗り越え四代にわたり、掛川葛布の老舗として「のれん」を守り続けいる。重松氏の調査後の大火の際、重松模型の原機も焼失したが、復元した機で現在も織っている。　　－川出幸吉商店当主のお話より－

馬毛織をご存知ですか

日本料理で使う「裏ごし」という調理器具があります。以前は裏ごしに張られた網は馬の尾の毛で織ったものが使われていましたが、最近はステンレスや合成繊維の網に代わっています。しかし日本料理の専門の調理人はすぐれた性能の馬の毛製にこだわりを持っています。

馬毛織は香川県仁尾町で生産されていましたが、技術を持つ人が途絶え入手困難になりました。馬毛織の網の裏ごしを製造していた東京都中野区の曲物師大川良夫・美富貴さんご夫妻は３年前から馬毛織を復元したいとの強い願いから繊維博物館や各地の手織機を訪ね歩きました。そしてお二人は馬毛織機が腰機（地機）と同じ形式であることから栃木県結城市を訪れ、結城紬の機を製造している職人さんに腰掛けてできる馬毛織用の機を試作してもらい、仁尾町で撮影したビデオを何度も見て技術の習得につとめ、ついに馬毛織の製作に成功したのです。

馬毛織の場合は毛の長さが限られているので、通常の織機のように巻き取ることができず、たて糸も別の糸と１本１本つないでいきます。横糸も杼がありませんから１本ずつ織りこみます。納得のいく製品を作り上げるまでの大川さんご夫妻の長い努力には本当に感動しました。

写真は１０月２・３日に開催された中野まつり伝統工芸展での実演風景です。

皆様からの各地の手織り情報をお待ちしています。

日本の手織機便り　第３号
発行　　東京都小金井市中町２－24－16 東京農工大学工学部附属繊維博物館　田中鶴代
発行日　平成１６年１０月１５日

カットは芳虎：蚕屋しない草（繊維博物館所蔵）